

# 玄武門の変と李世民配下の山東集団

——房玄齡と齊濟地方——

山下 将司

はじめに

唐の武徳九年（六二六）六月四日早暁、秦王李世民は、兄であり皇太子である建成を長安城の玄武門にて殺害した。これが世に名高い玄武門の変であり、この事件の二月後、李世民は帝位に即く。中国史上、屈指の名君とされる唐の太宗は、こうして誕生した。

この玄武門の変については、唐初における重大事件として古くから注目を集め、近年においてもこの事件に関する論考は盛んに公にされている。この事件をめぐる<sup>(1)</sup>はまず、これが「世族地主」と「庶族地主」という地主階級間の対立であるのか、それとも「閹隴集團」という同一統治集團内の宮廷闘争に過ぎないのかをめぐる議論となった。前者については呉沢・袁英光両氏が主張し、新興庶族地主の代表である李世民が、世族地主を代表する李淵・建成を打倒した事件であるとした。これに対し、布目潮瀾氏が後者の見解を唱えて批判した。布目氏は、事件の当事者たちの背後勢力について分析し、そこに質的差異は認められないとして、この事件を単なる宮廷内闘争と見な

し、唐朝統治階級内に大きな変化は生じないと結論づけた。<sup>(2)</sup>そして陳寅恪氏が主唱した「閔隴集團説」——唐初の支配者層を西魏北周以来の支配者層と同一と見なし、その体制が武周革命まで続くとする<sup>(3)</sup>——を支持したのである。

右の議論を受けて、この事件を「閔隴集團」内の権力闘争とする見方が主流を占め、以後その関心は李淵・世民・建成・元吉ら父子関係の推移へと移っていった。中でも注目されたのが、父帝李淵の動向である。これについては、①李淵が建成を支持したと見なすもの<sup>(4)</sup>、②李淵が世民を支持したと見なすもの<sup>(5)</sup>、③李淵と世民の対立を指摘するもの、という三つの傾向に分かれる見解が公にされた。特に近年においては③の見解が多く見られ、胡戟氏や鄭宝琦氏らの論説がある<sup>(6)</sup>。李淵に対する評価に相違はあるものの、これらの諸見解は陳氏・布目氏の「閔隴集團」説を前提としているため、おおむね、この事件を宮廷内闘争と見なし、事件による政權構造の変化には言及しないという共通点をもっている<sup>(7)</sup>。そのため、特に近年の研究においては、事件の当事者各人の背後勢力について、ほとんど分析されることがない。

しかしながら、その一方では、李世民的背後勢力と山東地方との関係がすでに指摘されている。例えば、「閔隴集團」説を主唱した陳氏も、隋末唐初の乱に関する研究の中では、この事件における李世民配下の「山東豪傑」に注目しており<sup>(8)</sup>、また隋末の群雄竇建徳の集團を考察した氣賀澤保規氏も、この事件に山東対閔隴の図式があることを示唆し<sup>(9)</sup>、近年では李錦綉氏が隋末唐初の山東勢力を分析し、かつて隋末の群雄李密に属した山東出身者が、この事件で李世民に貢献したことに注目している<sup>(10)</sup>。

とは言え、これらの論考においても、それら山東勢力が何故に、またいかなる経緯から、李世民と結びついたの

かという最も重要な点は十分考察されておらず、また玄武門の変の発生に関して、具体的にどのような要因となつたのかも分析されていない。そこで本稿では、李世民と山東勢力との具体的な関わりを分析し、そこからあらためて玄武門の変の要因を考察したい。

## 一、李世民的山東集團とその特色

### 1 秦王府の特徴

まず、玄武門の変において、李世民側に加担した者について見ると、『旧唐書』卷二太宗紀上に、

（武德）九年、皇太子建成、齊王元吉、太宗を害さんと謀る。六月四日、太宗、長孫無忌、尉遲敬德、房玄齡、杜如晦、宇文士及、高士廉、侯君集、程知節、秦叔宝、段志玄、屈突通、張士貴等を率いて玄武門に之れを誅す。

とあり、また同書卷六五長孫無忌伝には、

武德九年、隱太子建成、齊王元吉將に太宗を害さんと謀り、無忌、太宗に先に発して之れを誅さんことを請う。是に於いて旨を奉じ密かに房玄齡、杜如晦等を召して共に籌略を為す。六月四日、無忌、尉遲敬德、侯君集、張公瑾、劉師立、公孫武達、独孤彦雲、杜君綽、鄭仁泰、李孟嘗等九人と与に、玄武門に入りて建成、元吉を討ち之れを平らぐ。

とあり、あわせて十九名の名前が挙げられる。これら十九名のうち、劉師立・杜君綽の二名を除き、いずれも李世

民の幕府の府僚（秦王府・雍州牧）であつたことがはっきりしている。この李世民の配下集団には、すでに指摘されているように多くの山東出身者が名を連ねていた。『旧唐書』卷六四隱太子建成伝には、

（高祖）乃ち太宗に謂いて曰く、「……汝が兄弟を觀るに、終に是れ和せず、<sup>とも</sup>同に京邑に在りては、必ず忿競有らん。汝行台に還り、洛陽に居らば、陝<sup>よ</sup>自り已東、悉く宜しく之れを主<sup>つかさど</sup>るべし。……」と。……（太宗）將に行かんとするに及んで、建成、元吉相与に謀り……密かに數人をして封事を上らしめて曰く、「秦王の左右多くは是れ東人、洛陽に往くを聞き、非常に欣躍す。其の情狀を觀るに、今自<sup>よ</sup>り一たび去らば、來意を作さざらん」と。高祖是に於いて遂に停む。

とある。建成と世民の対立を見かねた李淵が、世民に洛陽へ遷つて不測の事態を避けるよう勧めたところ、建成は、「世民の配下は山東の出身者が多く、洛陽へ遷つたならば、そこに割拠して二度と戻つては來ない」と、父に反対を表明した。このように、当時においても、世民の集団は山東出身者が多數を占めると認識されていた。そこで今、李世民集団における主な山東出身者（及び北齊出身者）を一覧にすると、表1のようになる。<sup>(12)</sup>これを見ると、先の『旧唐書』太宗紀・長孫無忌伝に名が見える十九名のうち、山東・北齊出身者は実に十二名を数えることがわかる。中でも注目したいのが、当初、隋末の群雄李密に属し、のち唐へ帰属して李世民の秦王府に入つた者達である（④⑤⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱）。『大唐創業起居注』卷中に李密の集団についてふれ、

（李）密自ら旧封を復して魏公と為り、翟讓を号して司徒公と為す。讓の部する所の兵は並びに齊濟の間の漁獵の手たり。善く長槍を用う。

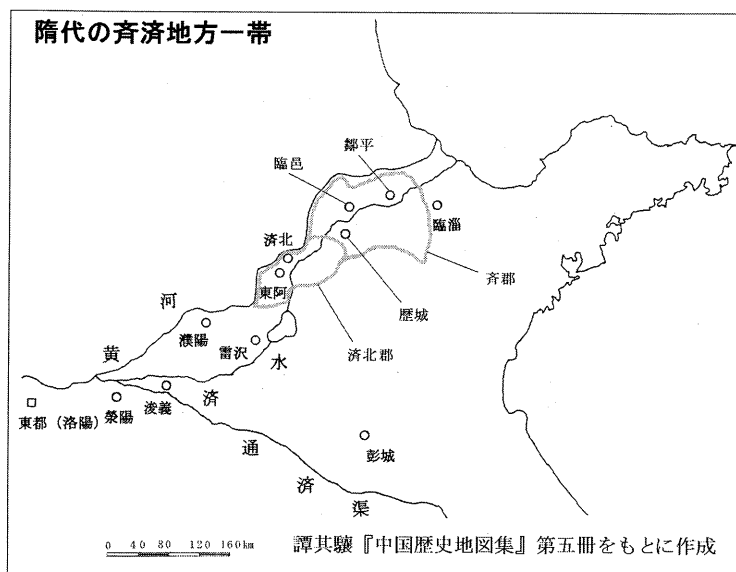
表1 李世民集團における山東・北齊出身者

氏名	本貫	祖父の官職	唐帰属の経緯	玄武門への加担	李世民集團における官職
① 尉遲敬德	朔州善陽	北齊・左兵郎中	劉武周→唐	○	秦王府右一統軍
② 房玄齡	齊州臨淄	北齊・齊州主簿	唐軍入関後帰順	○	秦王府記室
③ 高士廉	渤海蓆	北齊・侍中、太尉	武德五年帰順	○	雍州治中
④ 程知節	齊州東阿	北齊・晋州司馬	李密→王世充→唐	○	秦王府左三統軍
⑤ 秦叔宝	齊州歷城	北齊・荊王府司馬	李密→王世充→唐	○	秦王府右三統軍
⑥ 段志玄	齊州鄒平	北齊・□川太守	太原拳兵に参加	○	秦王府右二護軍
⑦ 張士貴	弘農盧氏	北齊・開府車騎將軍	一群雄→唐	○	秦王府右庫直
⑧ 張公瑾	魏州繁水	?	王世充→唐	○	?
⑨ 劉師立	宋州虞城	?	王世充→唐	○	左親衛
⑩ 杜君綽	中山曲陽?	北齊・中山郡功曹	義寧の初め帰順	○	?
⑪ 鄭仁泰	滎陽開封	北齊・□陽王記室參軍	武德二年? 帰順	○	秦王府帳内都督
⑫ 李孟常	趙郡平棘	北齊・本州主簿	李密→唐	○	「召入莫府委之爪牙」
⑬ 田留安	齊州臨邑	?	李密→王世充→唐	?	秦王府右四統軍
⑭ 吳黑闥	東郡濮陽	北齊・洛陽県丞	李密→王世充→唐	○	左馬軍總管
⑮ 牛進達	濮陽雷沢	北齊・淮北太守	李密→王世充→唐	○?	秦王府左一軍馬總管
⑯ 常何	汴州俊義	北齊・殿中司馬	李密→唐→王世充→唐	○	「左右驍騎」
⑰ 羅君副	齊州歷城	北齊・亭山県令	李密→王世充→唐?	○	秦王府左一統軍
⑱ 龐某	相州鄴	北齊・襄城王西閣祭酒	太原拳兵後に帰順?	○	秦王府右庫直
⑲ 李君羨	洺州武安	?	李密?→王世充→唐	?	秦王府右三統軍

※人名のゴチックは玄武門の変の加担者として『旧唐書』太宗紀上・長孫無忌伝に名が挙げられる者。本貫のゴチックは齊濟地方一帯の出身者。

玄武門の変と李世民配下の山東集團

山下



とあるように、彼らの多くは「斉濟間」すなわち唐の行政区画でいう齊州・濟州一帯の出身者であり、またその地域は「漁獵手」という言葉が示唆するように、済水流域にあたる。先述したように、この旧李密集団の出身者達が、玄武門の変において李世民的勝利に大きく貢献したことはすでに指摘があるが、彼らの隋末から唐帰属までの動きを追うと、その経歴・行動には多くの共通点が見られ、そればかりか、彼らは一団となって行動していたふしさえ伺われるのである。まずそれについて見ておこう。

## 2 秦王府における斉済出身者の動向

その共通点とはすなわち、(1)隋末、反乱集団に対し郷里を防衛、(2)李密集団が出現するとこれに帰属、(3)李密敗北後は王世充に属す、(4)武徳二年(六一九)に唐へ一斉に帰属、という四点である。まず(1)、(2)について見る

と、彼らが李密集団に属した経緯には、二つの類型が見られる。その第一は、隋末、郷里の郷人を糾合して反乱勢力に対抗し、のちに李密が台頭してくるとこれに属した者たちである。④程知節、⑭呉黒闥、⑯常何らがこれにあたり、『旧唐書』卷六八程知節伝に、

大業の末、徒数百を聚め、共に郷里を保ち、以て他盜に備う。

とあり、また「呉黒闥碑」に、

公は猛志攸鬱にして、雄規式啓たり。乃ち徒を濮上に嘯め、澄清の心有り。

とあり<sup>(13)</sup>、また敦煌文書 S. 6808 李義府撰「常何墓碑」に、

郷中の豪傑五百余人、公の誠信早に彰われ、譽望の集まる所なるを以て、互いに相糾率して、盟主為らんことを請う。公之れに謂いて曰く、……是に於いて共に公の言を稟け、咸指授に遵う。戎を訓え武を習い、義を闡<sup>あ</sup>わし仁を弘む。尊卑叶同し、壘壁嚴固たり。

とあるように<sup>(14)</sup>、いずれも郷人を結集し、当地に吹き荒れた反乱勢力に対抗していたことが見える。

第二は、当初、斉郡通守張須陁に組織された討伐軍に加わって反乱勢力を鎮圧し、張須陁が李密に敗死したのち、李密に帰属した者達である。⑤秦叔宝、⑬田留安がこれにあたる<sup>(15)</sup>。この張須陁に率いられた軍では、彼らの他にも歴城県出身の羅士信という人物が活躍しており、<sup>(16)</sup> 斉郡出身者を中心に組織されたことが伺える。右の二つの経緯に見られるように、李密集団に属した齊濟出身者は、いずれも当初、反乱勢力側ではなく、むしろそれを鎮圧する側に立っていたことが特徴として挙げられよう<sup>(17)</sup>。

さて、李密集団に属した彼らは、李密に重用され、程知節や秦叔宝らはその幕府の中心的人物となった。それは、『旧唐書』卷六八秦叔宝伝に、

（李）密、叔宝を得て大いに喜び、以て帳内驃騎と為し、之れを待すること甚だ厚し。

とあり、また同卷程知節伝に、

後に李密に依るや、署されて内軍驃騎と為る。時に密、軍中より勇士の尤も異なる者八千人を簡えらび、四驃騎に隸せしめ、分ちて左右と為して以て自ら衛り、号して内軍と為す。自ら云えらく、「此の八千人、百万に当たるべし」と。知節既に其の一を領し、甚だ恩遇せらる。

と記される如くである。しかし、李密は洛陽に籠もる王世充との間に死闘を繰り広げ、遂には大敗を喫し、関中の李淵を頼って河南を去った。この時彼らはいったん王世充に降ったが、李世民が陝東道大行台となり東征を委ねられた直後の武徳二年二月、一斉に唐へと奔った。それは、先掲の秦叔宝伝に、

又王世充の得る所と為り、龍驤大將軍に署さる。叔宝、世充の詐り多きを薄いしめ、其の出でて官軍に抗するに因りて、九曲に至り、程鯁金、呉黑闥、牛進達等数十騎と与に西へ馳せること百許歩、下馬し世充を拝して曰く、「殊礼を蒙ると雖も、仰うやぎ事する能わず、請う此従り辞さん」と。世充敢えて逼らず、是に於いて降る。高祖秦府に事つかえしむるや、太宗素より其の勇を聞けば、厚く礼遇を加う。

とあり、また『通鑑』卷一八七唐紀三高祖武徳二年二月の条に、

世充、唐兵と九曲に戦うや、叔宝、知節皆兵を將いて陳に在り。……遂に馬を躍らせ来降す。……時に世充の



驍將に又武安の李君羨、征南將軍臨邑の田留安有り。亦世充の人と為りを惡み、衆を帥いて來降す。世民、君羨を引きて左右に置き、留安を以て右四統軍と爲す。

とある如くである。一方、⑩常何は、右の程知節らとはやや異なる経緯を踏んでいる。常何は李密が王世充に敗れると、李密に随行して関中の唐へ帰属した。ところが、李密は李淵から山東方面の慰撫を命じられたことに乗じ、唐からの離反を謀った。この時の常何について先掲「常何碑」を見ると、

(李) 密詔を奉じて山東を綏撫するや、公は又本官を以て密に随う。密、函城の境に至り、背德の心有り。公既に逆謀を知り、乃ち流涕して極諫す。密は公の強正を憚り、遂に告げずして発す。軍は牛関の側に敗れ、命は熊山の陽に尽く。公義に徇うも従う莫く、忠を斯の阻に献ず。機に因りて以て効を立てんと欲し、尺を枉げて以て尋を直くせんと聊う。言に王(世) 充に造り、漣洛を傾けんと冀う。充の覺る所と為り、奇謀成らず。

充の内営の左右を率いて、逆を去りて順に帰す。高祖其の変通を嘉し、其の英烈を尚ぶ。臨軒して引見し、特に優獎を申ぶ。車騎將軍を授けらる。武德二年、劉弘基等と百崖に至りて招慰せしむ。

とある。常何は李密を諫めたものの、李密は聞き入れずに離反に踏み切り、唐軍によつて殺された。窮地に陥った常何は、王世充へと降った。墓碑によれば、王世充の政權を内部から切り崩す計画を抱いていたと言う。注目すべきはその次の箇所である。王世充にその計画を覺られた常何は、王世充の「内営左右」を引き連れて、再び唐へ属したというのである。次に記される劉弘基との軍事行動が武德二年であることから、この唐への帰属も、先に見た程知節らの帰属と同時期と見て大過ないであろう。あるいは、常何が誘ったという「内営左右」こそが、程知節や

秦叔宝らを指すのかもしれない。

さて、武徳二年に王世充より唐へ帰し、李世民的幕府に属した程知節らは、その後李世民的東征に従軍し、唐の統一戦争において華々しい活躍を示した。そして多くの者は、東征終了後よりただちに生じた建成と世民の抗争においても、終始世民陣営に属して彼を支え、武徳九年の玄武門の変へと至るのである。

ところで、右に見てきた程知節らの他に、次の羅君副も彼らと同様の経歴を踏んだようである。その墓誌を見ると、

公諱は君副、字進成、齊州歷城の人なり。……父曠、本州主簿、朝散大夫たり。公幼くして驍勇、善く籌策を運らす。……義旗肇めて建つや、身を挺して款を降す。上開府を授けられ、尋いで長槍馬軍副総管と為る。力を戎行に竭し、凶寇を剪摧す。上柱国を授けられ、又転じて秦王府驍騎將軍を授けられ、又秦王府左一統軍、左四府右車騎將軍に転じ、安山県子に封ぜらる。尋いで爵を安山県侯に進められ、食邑は七百戸。又太子左監門副率に遷り、尋いで左勳衛四府中郎將を授けられ、又右衛右翊衛一府中郎將に遷る。

とある。<sup>(18)</sup>さわめて簡潔な記述であり、その詳細な経歴は不明であるが、①齊州出身者であること、②「款を降す」とあるように、何らかの集団より唐に帰したと思われること、③秦王府の府僚から東宮の武官、さらに十六衛の武官へ昇進した経歴が、李世民が玄武門の変の後に行つた論功行賞の過程に合致すること、などから、羅君副も程知節・秦叔宝らと行動を共にした齊濟出身者と思われる。先述した羅士信と同じ歴城の羅氏であることから、恐らく張須陀→李密→王世充→李世民という経緯を辿つたのであろう。

以上のことから、程知節ら齊濟出身者たちは、前後して李密集団に属した後は、ほぼ一団となつて行動を共にし、李世民へと帰属してきたことがわかるであろう。ところで、玄武門の変に加担したメンバーを見直してみると、これら李密集団から唐へ帰属してきた者たちの他に、段志玄という齊州出身者も名を連ねている。段志玄は唐の太原挙兵以来の元従であるが、その出身が程知節らと同じく齊濟であることは注目すべきである。

さて、右に見てきたように、李世民の幕府には齊濟一帯の出身者が多く見られ、またその大半は、当初李密集団に属した者達であつた。では、彼ら齊濟出身者を、李世民へと強固に結びつけたものは一体何であつたのか。次にこれについて検討したい。

## 二、清河房氏与李密・李世民

### 1 房彦藻と房玄齡

前節で見た齊濟出身者が、当初属した李密の集団、そして、のちに彼らが王世充を去つて帰属した李世民の秦王府という二つの組織を比較すると、そこに一つの共通項があることに気付く。それは、ともに清河房氏の人物が謀臣として重用されていることである。

まず李密の集団について見てみよう。義寧元年（六一七）、李密は旧主の翟讓より盟主の地位を譲られ、魏公を称して行軍元帥魏公府を開いた。『隋書』卷七〇李密伝に、

越王侗の武賁郎將劉長恭、步騎二萬五千を率いて（李）密を討つ。密、一戦して之れを破り、長恭僅かに身を

玄武門の変と李世民配下の山東集団

山下

第八十五卷 一八三

以て免る。(翟)讓是に於いて密を推して主と為す。密、洛口の周廻四十里に城して以て之れに居る。房彦藻説きて予州を下し、東都大いに懼る。讓、密に号を上り魏公と為す。密初め辞して受けざるも、諸将等固く請えば、乃ち之れに従う。壇場を設け、位に即き、元年を称し、官属を置く。房彦藻を以て左長史と為し、邳元真もて右長史となし、楊德方もて左司馬となし、鄭德韜もて右司馬となす。

とあり、李密の開いた幕府の中に、左長史房彦藻なる人物の名が見える。さらに、『旧唐書』卷五三李密伝に見える李密が祖君彦に認めさせた檄文には、

清河公房彦藻、近くは戎律を乗り、地を東南に略す。師の臨む所、風行電撃たり。安陸、汝南、機に随いて蕩定さる。淮安、濟陽、俄然として款を送る。……滑公李景、考功郎中房山基発して臨渝自りし、劉興祖白朔に起ち、崔白駒潁川に在りて起ち、方猷伯譙郡を以て来たり。各々数万の兵を擁し、俱に牧野の会を期す。

とある。先の『隋書』の記述と併せてみれば、房彦藻は単に李密の謀臣であるだけでなく、自ら軍を率いて各地の平定も行い、李密の河南支配確立に重要な寄与をしているのである。では、この房彦藻とはいかなる人物であろうか。『隋書』並びに『両唐書』には立伝されず、詳しい事跡は見えない。しかし『通鑑』卷一八三隋紀七<sup>大業十二年</sup>(六一六)十月の条に、

前の宋城尉、齊郡の房玄藻、自ら其の才を負み、時用と為らざるを恨む。楊玄感の謀に預かり、姓名を交じて亡命し、梁宋の間に密と遇う。遂に之れと俱に漢沔に遊ぶ。偏く諸賊に入りて其の豪傑を説き、還るの日、従う者数百人。仍りて遊客と為り、(翟)讓の営に処る。讓、密の豪傑の帰す所と為るを見、其の計に従わんと

欲するも、猶予して未だ決せず。

とあり、その前歴と李密との関係が判明する。これによれば、房彦藻は、大業九年（六一三）に起こった楊玄感の反乱に加わり、楊玄感敗北後の逃亡生活のさなか、李密と邂逅したという。のち房彦藻は各地の反乱勢力を説いてまわり、ついに豪傑数百人を率いて翟讓の陣営に現れ、その客分となった。翟讓は、これを通して李密が人望を得ていることを覚つたのである。このように、房彦藻は李密が反乱集団の盟主となる以前から李密のために働いており、まさに李密の片腕と言うべき人物なのである。また李密の集団には房彦藻の他に、済陰の房献伯なる人物も見える。<sup>(19)</sup>

一方、李世民的第一の謀臣は、言うまでもなく房玄齡である。房玄齡は十八歳で郷里の進士に挙げられたが、官職は隰城の県尉にとどまった。さらに仁寿四年（六〇四）、煬帝の弟漢王諒の反乱に連座し、関中の上郡へ流された。以後不遇となり、官職に就いたことは見えない。その後、涇陽県令であった父の彦謙が病死し、その喪に服しているさなか、渭水北部の鎮庄に派遣されてきた李世民の陣へと駆けつけた。李世民はすぐさま意気投合し、その場で房玄齡を渭北道行軍記室參軍に任じた。以後房玄齡は李世民のために尽力し、『旧唐書』卷六十六房玄齡伝に、

賊寇平らぐ毎に、衆人競いて珍玩を求むるも、玄齡独り先に人物を取め、之れを幕府に致す。謀臣猛将有るに及んでは、皆之れと潜かに相申結し、各々をして其の死力を尽くさしむ。

とあるように、特に秦王府の人材収集に関して中心的な役割を果たしたことが注目される。また、すでに指摘されることではあるが、同卷杜如晦伝に、

時に府中に英俊多きも、外遷を被る者衆く、太宗之れを思ふ。記室房玄齡曰く、「府僚去る者多しと雖も、蓋し惜しむに足らず。杜如晦は聰明識達、王佐の才なり。若し大王藩を守り端拱せんとせば、之れを用いる所無し。必ず四方を經營せんと欲せば、此の人に非ざれば可なるもの莫し」と。

とあるように、かなり早い段階から、世民を帝位に即けるべく画策していた。玄武門の変についても、先掲房玄齡伝に、

既にして隱太子、太宗の勲徳尤も盛んなるを見、転た猜間を生ず。……玄齡困りて長孫無忌に謂いて曰く、「今嫌隙已に成り、禍機將に発せんとす。天下恟恟、人異志を懷く。変端一たび作らば、大乱必ず興らん。直だ禍府朝に及ぶのみに非ず、正に社稷を傾危せんことを恐る。此の際会、安くんぞ深思せざる可けんや。僕に愚計有り、周公の事に違ひ、外は区夏を寧んじ、内は宗社を安んじ、孝養の礼を申ぶるに若くは莫し。古人に云う有り、『国を為す者は小節を顧みず』と。此之れの謂いか。孰か家<sup>た</sup>国淪亡し、身名俱に滅ぶが若くせんや」と。

とあり、その首謀者であつたことが看取されるのである。

さて、右に見たように、李密には房彦藻、李世民には房玄齡というように、それぞれ清河房氏の人物がその片腕となつていた。では、この両者の関係はどうなのであるうか。先述したように、房彦藻については正史に列伝が無く、『通鑑』に記される経歴しか明かではない。ところが、房玄齡の系譜を『新唐書』卷七一下宰相世系表一下清河房氏房などに基づいて図示すると左のようになり、房玄齡の父の世代が皆「彦」字を排行していることがわかる

(表2)<sup>(20)</sup>。したがって、彦藻は玄齡の父彦謙の兄弟か、少なくとも彦謙の従兄弟であるとして見て間違いないまい。

このように見えてくると、李密そして李世民的幕府に、それぞれ謀臣となり活躍した清河房氏とは、いかなる家系であるのかが問題となろう。ここで少し時代的に遡り、清河房氏について詳しく見てみたい。

## 2 清河房氏と斉濟の歴史的つながり

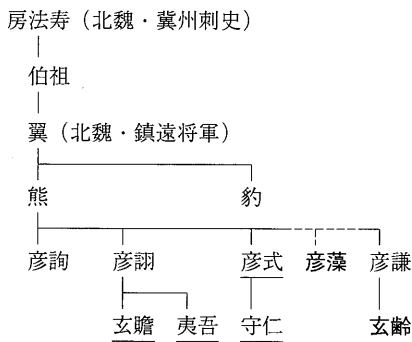
房玄齡・房彦藻を輩出した清河房氏の系譜については、『新唐書』卷七一下宰相世系表一下清河房氏房に、房氏は祁姓自り出づ……。沈の十二世孫、漢の常山太守雅、清河繹幕に徙る。十一世孫植、後漢の司空なり。

植の八代孫謙、慕容徳の南遷に随い、因りて済南に居る。四子あり、裕、坦、邃、熙、四祖と号す。裕の孫後魏の冀州刺史法寿。孫の翼、仕えて鎮遠將軍に至り、壮武伯を襲う。二子あり、熊、豹。熊、字は子彪、本州主簿、彦謙を生む。

とある。清河房氏はもともと河北の清河郡繹幕県に居住する一族であったが、十六国時代に慕容徳、すなわち南燕の南遷に連行され、山東の済南へ移住したという。

ところで、山東の門閥士族と豪強との勢力消長の変遷を通して隋末の乱を分析した黄惠賢氏によると、清河房氏はもともと二流の山東士族であったが、

表2 房氏系譜（下線部は墓誌に拠る）



玄武門の変と李世民配下の山東集団

山下

第八十五卷 一八七

北魏末に起こった六鎮の乱による混乱に乗じ、かえつて勢力を伸張させ台頭したという。<sup>(21)</sup>そのことを示す具体例として、黄氏は房士達の例を挙げる。房士達は玄齡から数えて四世代前の人物で、『魏書』卷四三房法寿伝に、

孝昌中、其の郷人劉蒼生、劉鈞、房須等乱を作し、攻めて郡県を陷し、頻りに州軍を敗る。時に士達、父の憂いありて家に在り。刺史元欣、逼りて其の將と為さんと欲すも、士達、礼を以て固辞す。……士達、已むを得ずして起ち、州郭の人二千余人を率いて、東西に討撃し、悉く破りて之れを平らぐ。……永安末、濟南太守に転ず。士達京師に入らず、頻りに本州郡と為る。時人之れを榮とす。

とあり、北魏末に発生した齊州の反乱を鎮圧し、しばしば本州の郡太守に就任したことが見える。

ところが、史料を繙いていくと、房氏は北魏末よりずっと以前から齊濟一帯に勢力を築いており、それは少なくとも北魏の献文帝期（宋の明帝泰始年間。四六〇年代後半）にまで遡ることがわかるのである。それを示すのは、宋の六代明帝の即位と同時に発生した、尋陽王劉子勛の乱に関する一連の記事である。この反乱は、宋領であった今の山東省一帯が北魏領へ移るきっかけとなった事件で、これに清河房氏が大きく関わっている。以下、これについて略述しよう。<sup>(22)</sup>

宋の泰始元年（四六五）十二月、湘東王劉彧が廢帝を殺害して即位すると（宋の明帝）、翌二年正月、これに対抗して宋の晋安王劉子勛が尋陽で皇帝を称した。すると、徐州刺史薛安都、青州刺史沈文秀、冀州刺史崔道固<sup>(23)</sup>といった淮河以北から山東にかけての州刺史は、一斉に劉子勛に呼応した。これに対し、平原・樂安二郡太守王玄默や清河・広川二郡太守王玄邈といった郡太守らは、かえって建康の明帝を支持、これによって齊濟一帯では、尋陽派



（劉子勛）と建康派（明帝）による激しい抗争が展開された。このとき、建康派に起つて活躍したのが、先の『新唐書』宰相世系表の清河房氏房にも名が挙げられる房法寿である。

房法寿は、王玄邈の司馬となり、尋陽派の冀州刺史崔道固の軍を何度も打ち破つて「甚だ歷城（冀州）の憚る所」<sup>(24)</sup>となった。これについて、『宋書』卷八八崔道固伝を見ると、

（崔道固）既にして土人の起義の攻むる所と為り、屢々戦うも利を失し、閉門して自守す。会々四方平定され、<sup>たまたま</sup>上（明帝）使を遣わして宣慰するや、道固詔を奉じて帰順す。

とある。右に見える「土人起義」とは、房法寿らの活動を指していると思われ、またこのことから房法寿が「土人」すなわち郷人を率いていたことがわかる。房法寿らの活躍により、崔道固は泰始二年の七月にはいったん降伏に追い込まれた。しかし、この房法寿の奮戦が事態を思わぬ方向へと導くことになる。『宋書』卷八八沈文秀伝に、

是より先、冀州刺史崔道固、亦歴城に據りて逆を同じくするも、土人の起義の攻むる所と為り、文秀と俱に信を遣りて虜を引かんとす。

とあるように、房法寿ら「土人」の攻撃に苦しんだ崔道固・沈文秀は、北魏に降つて援軍を要請したのである。<sup>(25)</sup>北魏は崔道固・沈文秀の要請に対し、征南大將軍慕容白曜らを派遣した。ところが、崔道固・沈文秀はその後結局明帝に降伏し、北魏軍が現れると逆に抗拒の姿勢をとった。このような錯綜した事態の中、齊洛の形勢を定めたのは、  
またもや房法寿の動向であつた。『魏書』卷四三房法寿伝には、

会<sup>たまたま</sup>從弟崇吉升城に在り。慕容白曜の破る所と為り、母妻、白曜の軍に没す。崇吉奔りて旧宅に還る。……崇吉

母妻の獲わるを以て、法寿に託して計を為さんとす。法寿、既に南行するを欲せず、道固を恨むこと逼切、又崇吉の情理を矜む。<sup>あわれ</sup>時に道固、兼治中房靈寶を以て清河、広川の郡事を督し、盤陽に戍せしむ。法寿、遂に崇吉と潜かに謀りて靈寶を襲い、之れを克す。仍りて款を白曜に歸し以て母妻を贖う。白曜、將軍長孫觀等を遣わし大山の南自り馬耳関に入りて以て盤陽に赴かしめ、崇吉の母妻を還す。初め、道固、軍を遣わして盤陽を囲むも、法寿等拒守すること二十余日、觀の軍至り、賊乃ち散じて走る。觀の軍城に入るや、詔して法寿を以て平遠將軍と為し、韓麒麟と対して冀州刺史と為す。……法寿の従父弟靈民を以て清河太守と為し、思順もて濟南太守と為し、靈悦もて平原太守と為し、伯憐もて広川太守と為し、叔玉もて高陽太守と為し、叔玉の兄伯玉もて河間太守と為し、伯玉の従父弟思安もて樂陵太守と為し、思安の弟幼安もて高密太守と為し、以て初附を安んず。

とある。房法寿の従弟崇吉は、并州刺史として升城に駐屯していたが、<sup>(26)</sup>北魏から派遣された慕容白曜によって破られ、母・妻が人質となった。この事態を受けた房法寿は、旗幟を建康派から北魏へと変え、当地の要衝であった盤陽城を占拠して北魏軍を迎えた。そして、冀州一帯の郡太守はすべて彼の一族で占められたのである。この房氏の北魏への帰属は、この地の形勢をも決定づけた。崔道固と沈文秀は以後も北魏に対し抵抗を続けたものの、完全に孤立無援となり、北魏に降伏したのである。

房法寿が濟南を中心とする冀州一帯に相当の影響力を有していたことは、先掲房法寿伝にある崔道固が明帝に降つたときの記事からもわかる。すなわち同伝には、

表3 房法寿の一族と齊濟

人名	仕官先	法寿との関係	齊濟一帯における官職
亮	北魏	従弟	濟州中正、濟北太守、贈齊州刺史
詮	〃	従弟	本州中正、贈齊州刺史
悦	北魏・東魏	従弟	広川太守（齊州）、南清河太守（濟州）、贈濟州刺史
伯祖	北魏	子	齊郡内史
景伯	〃	族子	齊州輔国長史、行齊州事、贈齊州刺史
景先	〃	族子	齊州中正
景遠	〃	族子	齊州主簿
士隆	東魏	従弟の子	東清河太守、盤陽鎮将（ともに齊州）
士達	北魏	従弟の子	濟州左將軍府倉曹參軍、濟南太守、本州郡、贈齊州刺史
超	東魏	従弟の子	濟州大中正
豹	〃	曾孫	齊州主簿、樂陵太守
熊	〃	曾孫	齊州主簿
彦詡	東魏～隋	曾孫の子	青州法曹參軍、千乘県令
彦謙	東魏～隋	曾孫の子	齊州主簿、齊州中從事

（劉）子勛死して、道固、文秀悉く復た或（劉或。宋の明帝）に帰すれば、乃ち兵を罷む。道固、其の百姓を扇乱するを慮り、遂に切に之れを遣わさんとす。而るに法寿、外は装弁に託し、内は行くを欲せず。

とあり、崔道固が恐れた房法寿による「扇乱百姓」とは、先に『宋書』で見た「土人」を率いた房法寿の活動を指すのであろう。一方、房法寿が当初敵対した尋陽派の中にも房氏の人物があり、崔道固の下には兼治中房靈賓、沈文秀の下には青州長史房天楽の名が見える<sup>(27)</sup>。

以上、北魏による齊濟一帯の征服において、房氏が大きく関与していたことを見てきた。慕容徳による南遷以後、右のような房氏の勢力がいかにして築かれたかは不明であるが、四六〇年代においては、既にこの地の趨勢を左右するほどであった。そしてこれ以後も、房法寿の一族とその末裔は代々齊濟に地方官を輩出し、それは房玄齡の父彦謙の代にまで及んでいるのである（表3）<sup>(28)</sup>。

またのちの唐初のことであるが、『太平實字記』卷一九齊州歷城県の条を見ると、

隋末、土人李滿、郷人を率いて堡に據り、贍<sup>じき</sup>わすに家財を以てす。武徳二年、滿、城を以て帰す。因りて堡を以て譚州及び平陵県を置き、滿を以て譚州総管と爲す。

とある。武徳二年の当時、河北の竇建徳、洛陽の王世充はなお健在であり、唐から見れば、歴城ははるか飛び地であつた。にもかかわらず、歴城の「土人」李滿が唐へ帰したのには、やはり清河房氏の影響力があると見て良いのではなからうか。

右のような、清河房氏と齊濟一帯との歴代に及ぶ強い結びつきを考えると、第二節で見た程知節や秦叔宝らを、強固に李密・李世民へと結びつけた媒介とは、まさに清河房氏の房彦藻と房玄齡であり、また李密敗北後、程知節・秦叔宝らが王世充から一齊に李世民へ帰順したのも、その背後に清河房氏すなわち房玄齡の影響力があつたと見るべきであろう。<sup>(29)</sup>「貞觀の治」と言えば必ず「房杜」と称され、杜如晦とともに名が挙げられる房玄齡であるが、實際には、李世民への影響力は房玄齡の方が断然強い。房玄齡が李世民にそれほど重用され、また玄武門の変後に宰相の地位を得たのも、このような勢力を背景に持っていたからこそと考えられるのである。

李世民下の秦王府に山東出身者が多いことは以前より指摘されてきたことであるが、その核には、右のような房玄齡を中心とする齊濟出身者のグループが存在し、また李世民は、その房玄齡に突き動かされ、皇太子位奪取の計画を推し進めていったのである。それでは、このような齊濟出身者を核とした李世民的集団が、何を契機として玄武門の変というクーデタに踏み切つていくのか。最後にそれについて見ることにしたい。

### 三、関中十二軍の再設置と玄武門の変の発生

武徳六年（六二三）、隋末唐初の群雄のうち最後に残った河北の劉黑闥も、皇太子建成によつて鎮圧され、唐の国内における軍事行動はほぼ終わりを告げた。これにともない、皇太子建成と秦王世民の確執・対立はいよいよ激しさを増していく。この両者の対立は、『通鑑』によれば武徳五年に初めて現れ、同七年より対立の激化していく様子が見える。そして、この対立は父帝である李淵をも巻き込んでいった。そのことを端的に示すのが、秦王府僚であつた程知節の切り離し工作である。『旧唐書』卷六八程知節伝に、

武徳七年、建成之れを忌み、之れを高祖に構うるや、康州刺史に除せらる。知節、太宗に白して曰く、「大王の手臂今並びに剪除せられんとす。身必ず久しからざらん。知節は死を以て去らず。願わくは速やかに自ら全うせよ」と。

とあるように、建成は程知節を秦王府から引き離そうと画策し、その意を受けた李淵は程知節を康州刺史に任じ外へ出そうとした。さらに「程知節墓誌」を見ると、

尋いで使持節、康州諸軍事、康州刺史に拝せらる。……尋いで教を奉じて留任し、右二府護軍に除せらる。<sup>(30)</sup>  
とある。これによれば、程知節が勅命により康州刺史に任じられると、世民は秦王の教を發して程知節を留らせ、あらためて自らの幕府の武官に任じた。このように、李淵は建成の意向を受けたとはいえ、世民の幕府の解体に乗りだしており、一方の世民は、李淵の勅命を自らの教によつて取り消すという行為に及んでいる。<sup>(31)</sup>武徳七年時、す

でに父帝李淵をも巻き込んだ対立が、抜き差しならない緊張状態に達していることがわかるであろう。

では、当の李淵の意向はどのようなものであったのだろうか。それを示すものとして、武徳八年（六二五）に復活した関中十二軍の存在に注目しなければならない。なぜなら、政權の交代やクーデタといった事件において、最も重要なのは軍事の掌握だからである。

この関中十二軍とは、唐朝の成立間もない武徳二年七月に初めて置かれ、関中を十二のブロックに分ち、軍將・副將を一名ずつ配置した軍管区制で、前線への兵力供給を目的としたとされる。『冊府元龜』の記述によれば、唐軍が他の群雄より精強であつた要因ともされる重要な制度であつたが、<sup>(32)</sup>武徳六年の国内戦争の終焉にともない、この体制も廃止されていた。

ところが、廃止から二年を経た武徳八年四月、唐は再び関中十二軍を置いた。<sup>(33)</sup>それは、武徳七年より突厥の侵寇が激しくなり、これへの対処が新たな唐の課題として迫ってきたためであつた。これ以後、唐の対突厥戦は、玄武門の変が起こる武徳九年の六月に至るまで、この関中十二軍に配された十二人の軍將を中心に遂行されていく。その様子については、『冊府元龜』巻九九〇外臣部備禦三や『通鑑』唐紀三武徳八年の条に詳しい。今、ここで我々が注目したいのは、その十二人の軍將の内訳である。武徳八年に再設置された関中十二軍の軍將を、一覧にすると左表（表4）のようになる。

まず、軍將達の出自について見ると、それはおもに、①太原拳兵以来の元從、②宗族・姻族、③隋の高官（李淵の同僚）、の三つから成る。要約すれば、李淵の元從集団によって構成されているとしてよい。逆に、この十二軍

表4 武徳八年の関中十二軍成員

⑫	⑪		⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	軍名	管轄	担当者	本貫	唐への帰属	官職	玄武門後の官職	備考
苑游軍	平道軍	岐州		天紀軍	折威軍	招搖軍	天節軍	騎官軍	羽林軍	井鉞軍	玄戈軍	鼓旗軍	參旗軍	西麟州	錢九龍	もと晋陵	太原元從	右武衛將軍	眉州刺史(劍南道)	李家の隸人
			羅芸	王長諧	楊毛	安修仁	樊世興	長孫順德	張瑾	劉弘基	淮安王神通	楊恭仁	寶誕		柴紹	晋州臨汾	幽州の群雄↓唐	左翊衛大將軍	右衛大↓左衛大↓華州刺史	李淵の女婿
				高平	?	涼州姑臧	もと安陸	河南洛陽	?	雍州池陽	關中にて拳兵	弘農華陰	扶風平陵				太原元從	右監門衛大將軍	開府儀同三司	
						李軌↓唐	太原元從	太原元從	王世充↓唐	太原元從	關中にて拳兵	字文化及↓唐	唐軍入關後	唐への帰属				右衛大將軍	梁州都督(山南西道)	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職				右衛大將軍	雍州牧↓行揚州大都督府長史	
							太原元從	左驍衛大將軍	右衛大將軍	右驍衛將軍	左武衛大將軍	吏部尚書・左衛大將軍	太常卿	官職			</			

の中には、あの李世民に付き従って東征に活躍した秦王府系の人物は全く見えない。また、先述した『冊府元龜』卷九九〇外臣部備禦三や『通鑑』唐紀三武徳八年の条を見ても、この対突厥戦において李世民が出撃を命じられたのは武徳九年二月の一度のみであり、それも「竟には行かず」とあって、<sup>(34)</sup>実際には戦闘に参加していない。

右の十二軍における特徴とその動きから、武徳八年より始まった対突厥戦は、明らかに李淵の主導の下に進めら

れていたことがわかる。李淵は、対突厥戦という新たな課題に直面したとき、それまで東征を中心的に担ってきた秦王府集団とは構成を異にする軍事体制を築いたのであり、そこには、軍事の中心を李世民集団から自らの元従へ移行させようとする意図がはつきり現れているのである。

では、一方の李世民的目には、関中十二軍の体制はどう映ったであろうか。そこで注目したいのが、十二軍軍將の、玄武門の変への関与と、彼らに対する変後の措置である。まず前者について見ると、変への関与がはつきりしているのは⑥長孫順徳のみで、彼は世民側に加担した。また⑧安修仁は、『兩唐書』に立伝されずその動向が明らかではないが、兄の興貴の子、安元寿が世民側に加担したことが見えるため、あるいは世民に内通していたのかもしれない。<sup>(35)</sup>しかしその他の軍將については、変への関与は一切見えない。

次に後者について、世民が玄武門の変後、関中十二軍をどう処したかは史料上に明記がない。しかし、軍將に対する世民の措置を見れば、それは一目瞭然である。変後の軍將たちの動向を挙げると、(1)実職のない散官（開府儀同三司）へ左遷（③淮安王神通・⑩羅藝）、(2)外官へ転出（①竇誕・②楊恭仁・⑫錢九龍）、(3)李孝常の謀反に連座して免官（④劉弘基・⑥長孫順徳・⑦樊世興）、<sup>(36)</sup>(4)以後の記録から消失（⑨楊毛・⑩王長諧）、という四つにおおむね分けられる。突厥が依然として脅威を振るう中にもかかわらず、李世民が玄武門の変後ただちに十二軍を解体したことは、右の(1)と(2)から明らかである。このことから、関中十二軍とは、世民と対立する体制であり、玄武門の変によって権力を掌握した世民にとって、放置すべからざる体制であったことがわかるのである。そして、右の措置は単に十二軍の解体にとどまらず、政權構造の変化をも意味するものであった。『旧唐書』卷六〇宗室伝淮安王神通伝には、



この措置に不平を述べる神通と世民とのやりとりが見え、

貞觀元年、開府儀同三司に拜され、実封五百戸を賜る。時に太宗諸々の功臣に謂いて曰く、「朕公等の勲效を叙し、封邑を量定せるも、尽く当たる能わざるを恐る。各々自ら言え」と。神通曰く、「義旗初め起るや、臣兵を率いて先に至る。今房玄齡、杜如晦等は刀筆の人なるに、功第一に居るは、臣且に服せず」と。上曰く、「義旗初め起るや、人皆心有り。叔父兵を率いて先に至ると雖も、未だ嘗て身づから行陣を履まず。山東未だ定まらざるとき、委を受け征を専らにす。建徳南して侵すや、全軍陥没せり。劉黑闥翻動するに及び、叔父風を望みて破らる。今勲を計りて賞を行うに、玄齡等帷幄に籌謀し社稷を定むるの功有り。漢の蕭何たる所以なり。汗馬無しと雖も、指縱推轂す。故に功第一に居り。叔父国に至親たるも、誠に愛する所無し。必ず私に縁りて濫りに勲臣と賞を同じくすべからざるのみ」と。

とある。ここに、唐における功臣の価値基準は逆転し、創業の元従から玄武門の功績者へと移つたのである。これとはとりもなおさず、李淵の企図した体制の破壊を意味しよう。

一方、右の淮安王神通と同じく開府に左遷された羅藝は、謀反を起こして敗死し、また(4)に見られる如く、玄武門の変の直後、貞觀元年(六二七)に発生した義安王李孝常の謀反に連座した者もあり、世民の変後の措置が、宗室・元従にとつて受け入れがたいものであったことがわかるのである。

以上、右に見てきたことから、武徳八年以後、齊濟出身者を核とした山東集團を抱える李世民と、自らの元従集團を中心に軍事の再編をはかる李淵との対立という図式が、はっきりと浮かび上がつてこよう。そして、この対立

の頂点に来るのが玄武門の変というクーデタなのである。それは、従来言われるような建成と世民の単なる宮廷内闘争にとどまるものではない。父帝李淵と世民の対立も重要な要素としてそこにあったのであり、その対立は、それぞれがもつ権力基盤の相違から生じたのであった。<sup>(37)</sup>

## むすび

以上、本稿で述べてきたことをまとめると、

①李世民の秦王府府僚には、山東及び旧北斉の出身者が多いが、中でも玄武門の変の首謀者房玄齡を中心とする齊濟出身者のグループが存在していた。

②その房玄齡の家である清河房氏は、すでに北魏の献文帝期には、齊濟一帯に看過し得ない勢力を築いていた。李世民が齊濟出身者を引きつけることができたのも、その配下に房玄齡が存在していたためである。

③一方、李淵が突厥対策のために武徳八年に設置した関中十二軍は、太原拳兵の元從集団や宗室を中心に構成され、秦王府とは対立する性格を有していた。対突厥戦はこれらの者を中心に進められたのである。

④このように、玄武門の変は、齊濟集団を初めとし多くの山東人を背後にもつ李世民と、それらを排除し、太原拳兵以来の元從集団を中心とする軍事体制の再編を目指した李淵（とそれを受け継ぐ皇太子建成）との衝突という側面を持っていた。

ということになろう。

すなわち、李世民は齊濟地方を中心とする山東出身者に支えられてクーデタを成功させたという側面が存在するのはまぎれもない事実であり、玄武門の変を「閹隴集團」内の宮廷鬭争とのみ見るのは、不十分な理解と言わざるを得ない。

ところで、先に筆者は、従来隋唐の形成に中心的役割を果たしたとされる「八柱国家」について検証を行い、実はそれが唐の太宗朝において作られた門閥觀念であったことを明らかにした。<sup>(38)</sup> 本稿はその「八柱国家」を創出した太宗——李世民が、政權獲得の過程で依拠した配下集團の性格を分析したものである。

玄武門の後、太宗朝では新しい勢力秩序を整理するために『貞觀氏族志』が編纂された。しかし、そこで示されたものは、山東勢力優位の秩序であった。そのため、唐李氏の格付けをはかる必要が生じ、「八柱国家」が創出されていくのである。

## 註

- (1) 吳沢・袁英光「唐初政權与政争の性質問題——唐初武德・貞觀年間的階級鬭争与統治階級内部鬭争」(『歴史研究』一九六四一二)。
- (2) 布目潮風「玄武門の変」(大阪大学教養部『研究集録』一六人文・社会科学、一九六八。同氏『隋唐史研究——唐朝政權の形成』京都大学東洋史研究会、一九六八再録)。また同書所収の他論文も参照。
- (3) 陳寅恪『唐代政治史述論稿』(重慶商務印書館、一九四三)。
- (4) 宋家鈺「李淵・李世民与『玄武門之變』」(『學習与研究』一九八二一〇)。
- (5) 牛致功「玄武門之變与唐高祖讓位析」(『人文雜誌』一九八〇一六、凌中「李淵与玄武門事變」(『歷史知識』一九八四一五)。
- (6) 胡戟・胡樂「試析玄武門事變的背景内幕」(中國唐史

学会編『唐史学会論文集』、陝西人民出版社、一九八六）、鄭宝琦「玄武門之變」起因新探」（『文史哲』一九八八—四）。他にも、程宗才「玄武門之變」新探」（『人文雜誌』一九九一—三）、喬宗傳「玄武門之變与貞觀之治」（『晋陽學刊』一九九三—二）など参照。また右以外に李淵・建成・世民の父子關係に注目したものに、李淵が建成・世民間の抗争を黙認・助長したと Andrew Eisenberg, "Kingship, Power and the Hsian-wu Men Incident of the T'ang", *Young Pao*, Vol. LXXX, 1994 単なる建成と世民の対立と見る王素・邵千才「玄武門之變真相」（『文史知識』一九九八—三）がある。父子關係以外に注目したものととしては、当時の世民の官職から世民の勝利を必然とする杜文玉「從唐初官制看李世民的奪位的基本条件」（『渭南師專學報』社科版、一九九八—六）、石刻史料から事件當事者達の経歴と事件当日の動向を分析した牛致功「試論玄武門之變的參加者」（『中華文史論叢』六二、二〇〇〇）などがある。さらにこの事件に関する史料をめぐっては、政權獲得後の世民による捏造を強調する李樹桐「玄武門之變及其对政治的影響 上下」（『大陸雜誌』二二—五・六、一九六七。同氏「唐史考弁」台湾中華書局、一九七二再録）、「玄武門之變的再認識」（『大陸雜誌』七二—一、一九八七。

同氏「唐史索隱」台湾商務印書館、一九八九再録）や胡如雷「玄武門之變」有関史事考辨」（『中国古代史論叢』一九八二—一、同氏「隋唐政治史論集」河北教育出版社、一九九七再録）がある。この玄武門之變の研究史については胡戟等主編『二十世紀唐研究』（中国社会科学出版社、二〇〇二）所収の「玄武門之變」の項（二九頁—三二頁、蘇士梅執筆）を参照された。

(7) 玄武門之變の專論ではないが、孫英剛「唐代前期宮廷革命研究」（榮新江主編『唐研究』第七卷、二〇〇一）も、この事件を唐前半に起きた一連の宮廷革命の中に位置づけて分析する。一方、この事件が単なる宮廷内鬭争でないことを示唆する論考も存在する。石見清裕「玄武門前夜の突厥問題」（『史観』一〇八、一九八三。同氏「唐の北方問題と國際秩序」汲古書院、一九九八再録）はこの事件の背景として、建成・世民間に突厥対策をめぐって路線対立があったことを指摘し、また礪波護「法琳の事蹟にみる唐初の仏教・道教と国家」（吉川忠夫編『中国古道教研究』同朋舎、一九九二）は、この事件の背景に仏教勢力と道教勢力の対立があったことを指摘する。

(8) 陳寅恪「論隋唐初所謂『山東豪傑』（『嶺南學報』二二—一、一九五二）。

(9) 氣賀澤保規「竇建德集団と河北——隋唐帝国の性格をめぐって——」(『東洋史研究』三一—四、一九七二)。ただし、氣賀澤氏の言う「山東勢力」には、河北に割拠した

旧竇建德・劉黑闥の集団が想定されているようである。

(10) 李錦綉「論・李氏將興——隋唐初山東豪傑研究之一——」(『山西師大学報』社会科学版、一九九七—四)。

(11) 例えば李錦綉氏は、「山東豪傑」と李密・李世民的結びつく契機を、楊玄感の乱に求める。楊玄感と李密によって「山東豪傑」と閩隴貴族との同盟が形成され、そのため李密敗北後も、「山東豪傑」は必然的に李世民と結びついた、とする。しかし、その同盟が具体的にどのようなものであったのか、また「山東豪傑」が何故に(李淵や建成でなく)李世民に結びついていったのか、十分に明らかにされていない(註(10)所引論文)。

(12) 表1は『阿唐書』各列伝のほか、「尉遲敬德墓誌」「程知節墓誌」「段志玄碑」「張士貴墓誌」「李孟常(嘗)墓誌」「杜君綽碑」「吳黑闥碑」「牛進達墓誌」「鄭仁泰墓誌」(以上、張沛編著『昭陵碑石』、三秦出版社、一九九三所載)、「常何碑」(敦煌文書P.2640)、「羅君副墓誌」(毛漢光撰『唐代墓誌銘彙編附考』第一冊、台灣中央研究院歷史語言研究所、一九八四所載)、「秦儉墓誌」(同上第三冊所載)、

「龐果碑」(『文館詞林』卷四五三)、「冊府元龜」卷三九六將帥部勇敢三によった。

(13) 前註所引『昭陵碑石』所載。

(14) 常何の出身は墓誌に「今為汴州浚義人也」とある。しかし、李密および唐からはともに雷沢公に封ぜられている。雷沢はより東方の済水流域にあり、常何はこの一帯と関係が深いと思われる。なお「常何碑」については、黃惠賢「常何墓碑跋」(『江漢論壇』一九八二—二)、黃永年「敦煌寫本常何墓碑和唐前期宮廷政變中的玄武門」(同氏『唐代史事考釈』連経出版、一九九八載録)、劉寶進「常何与隋末農民起義——從敦煌遺書《常何墓碑》談起」(『敦煌研究』一九九〇—一)、同氏「常何与隋末唐初政治」(『中国史研究』一九九八—四)等がある。

(15) 『旧唐書』卷六八秦叔宝伝・『新唐書』卷八九秦瓊伝、「冊府元龜」卷三九六將帥部勇敢三。

(16) 『旧唐書』卷一八七上忠義伝上、「新唐書」卷一九一忠義伝上。

(17) ⑮牛進達については、「牛進達墓誌」(註(12)所引)に、

属々漢東淪覆し、中原潜沸す。四瀆鯨奔し、五方鵠起す。君乃ち力士を求むと言ひ、逸氣を沙中に憤らす。俠客を

直視し、且つ檢次に酣歌す。暫く李密に臣<sup>つか</sup>うるも、卿子の嬌亡を知る。甫<sup>さ</sup>め楊侗に託すも、秦嬰の繫組を察す。とあり、李密に属する以前の経歴については、ただ前漢の張良・戦国の荊軻の故事が引かれるのみで、詳細はわからない。

(18) 毛漢光編『唐代墓誌銘彙編附考』第一冊所載。

(19) 『通鑑』卷一八三隋紀七義寧元年二月の条。

(20) 『新唐書』宰相世系表の他、『魏書』卷四三、『北史』

卷三九、「房彦詡墓誌」「房夷吾墓誌」(蘇玉琼「房氏墓誌

考略」『中原文物』一九九五—二〇〇六)および「房守仁墓誌」

(周紹良主編『唐代墓誌彙編』上海古籍出版社、一九九二

の貞観〇二一)による。

(21) 黄惠賢「論隋末唐初的“山東豪傑”」(『中国農民戦争

史論叢』第五輯、中国社会科学出版社、一九八七)。

(22) この事件の推移は、『通鑑』卷一三〇宋紀一二一―卷一

三三宋紀一四に詳しい。

(23) 冀州は今の山東省に宋が置いた僑州で、治所は歴城に

あった(『宋書』卷三六州郡志二)。

(24) 『魏書』卷四三房法寿伝。

(25) 『魏書』卷六顯祖紀によれば、崔道固と沈文秀が北魏へ帰属を表明したのは北魏の皇興元年(すなわち宋の泰始

三年)閏月(正月のあと置かれた)。これに先立ち、泰始二年九月には同じく尋陽派であつた徐州刺史薛安都が北魏に降つて援軍を要請しており、これを受けて北魏の介入が始まつていた。

(26) このとき崇吉は東太原太守(僑郡)も兼ね、その治所が升城であつた。升城は歴城の西南にあつた。(『魏書』卷四三、『通鑑』卷一三三宋紀一四泰始三年二月条の胡注)。

(27) 『魏書』卷六一沈文秀伝。

(28) 『魏書』卷四三・六一・七二、『北史』卷三九、『北齊書』卷四六、『隋書』卷六六、「房彦詡墓誌」(註(20)所

引)による。

(29) なお房彦藻は、李密の敗北より早い武徳元年二月、竇建徳のもとへ使者として赴いた帰途、「賊師」のひとりに

よつて殺害された(『通鑑』唐紀卷一八五武徳元年二月条)。

(30) 註(12)所引『昭陵碑石』所載。

(31) 『通鑑』卷一九一はこの一件を武徳九年六月の条に置くが、『旧唐書』程知節伝には武徳七年とあり、また「程知節碑」「程知節墓誌」(共に註(12)所引『昭陵碑石』所載)もこれを九年以前に置く。同様に『通鑑』は、尉遲敬徳・段志玄・房玄齡・杜如晦らに対して行われた建成の引き離し工作についても、全て玄武門の変があつた武徳九年

六月に置くが、これらも実際には七年から九年にかけて徐々に行われたと見るほうが妥当であろう。

(32) 『冊府元龜』卷二二四帝王部修武備の条。

(33) 『唐会要』卷七二京城諸軍には、十二軍の最初の設置は武徳三年三月七月十一日、廃止は同六年二月二十四日、再設置は同八年五月とある。

(34) 『冊府元龜』卷九九〇外臣部備禦三。

(35) 『安元壽墓誌』。註(12) 所引「昭陵碑石」所載。

(36) 『通鑑』卷一九二唐紀八貞觀元年一二月戊申条、『旧唐書』卷五八劉弘基伝・長孫順徳伝。なお、樊世興については『旧唐書』卷五七劉文靜伝に、「(樊世興) 尋坐事削爵」とあるのみであるが、時期的にこの事件への連坐と見られる。

(37) ただし、これは直ちに山東対閩隴という図式を示すものではない。布目氏による分析以来、李淵の元從集団は閩

隴集団であると見なされがちであるが(「李淵の起義」、同氏前掲書載録)、そもそも陳寅恪氏が主唱した「閩隴集団」が西魏・北周以来の支配層を指すのに対し、布目氏がとらえた枠はもつと大きく、東魏・北斉を(あるいは南朝出身者も)含む北朝・隋の支配層を同一系統と見なしている。

このように本来両者の見解には範囲の相違があるはずであるが、布目氏自身が自説を「閩隴集団」説と同様であるとしたことから、混一されたまま今日に至っている。小論の考察によれば、李淵が閩中十二軍を設置して元從集団による軍事掌握を目指したことから、一見、李淵・李世民の対立は山東対閩隴の図式に見えるかもしれない。しかし、それはあくまでも、李淵が自己勢力の保全に閩中十二軍という軍事制度を利用したに過ぎないのである。

(38) 拙稿「唐初における『貞観氏族志』の編纂と「八柱国家」の誕生」(『史学雑誌』一一一一二、二〇〇二)。